

巻頭言

杏林大学医学部 泌尿器科学教室
(杏林医学会 編集幹事)
桶川 隆嗣

連日のように新型コロナウイルスの記事を読む。クルーズ船内感染、屋形船内感染、そして院内感染と閉鎖空間での濃厚接触での感染、感染後の動向などが連日報道されている。すでに市中感染の土壌は出来上がっているかもしれない。もはや相当数の感染拡大は避けられない。日本は武漢市・湖北省のように、首都圏全域で交通遮断、移動禁止措置は不可能なので一旦火が付いたら鎮火はより困難である。一番怖いのは、和歌山のように誰も知らないうちに院内感染が起きていることである。政府もそのフェーズに入りつつあるくらい認めて、声明として発信すべきであると思ったところ、2月14日厚生労働省より声明あり。とにかく、一人一人が意識を持って咳エチケットや頻繁な手洗いなどを実施することである。

この時期、受験時期にてインフルエンザ罹患に注意し受験者を心配するのが常であったが、今年度は新型コロナウイルスによる肺炎(COVID-19)の感染が確認される中、インフルエンザ患者数が減少傾向にあるとのこと。前年同期に比べ6分の1にとどまっているとのこと。コロナウイルス対策を徹底していることが要因ではないかと推測されている。2月14日、横浜市で第35回日本環境感染学会総会・学術集会在開催され、緊急セミナー「新型コロナウイルス感染症の対策を考える」で、WHO健康危機管理プログラムシニアアドバイザーの進藤奈邦子氏が登壇され、「日本がここでうまく食い止められないと、WHOはelimination(根絶)を諦めて、mitigation(被害軽減)のフェーズに入らなければいけない。日本が頑張ってくれるかどうかで、世界の方針が変わってくる」と述べている。「東京2020」に向けて、国際的に非常に注目度が高くなっていくところなので、ここで日本の力を終結して、終息の方向に向けられるように踏ん張っていききたい。巻頭言が読まれている時には、終息していることを願いたい。

話が変わるが、昨年より特集号で担当していただいた先生の対談を掲載している。特集テーマ以外に担当されている教室のカラーや学生への思いなどが感じ取れるのではないだろうか。先日、幹事会にて、今年度の医学部50周年記念行事に合わせたテーマとして、まずは医学部の今後について副理事長との対談を企画し(状況によっては、医学部長、教務部長含む)、そこから波及して全学部と同様の企画を広めていってはどうかの提案があった。これからの少子化に向け、学生により選ばれた大学を目指す為にも、対談の質問事項は父兄会員からアンケート方式で募集し、医学部、保健学部ご父兄の率直なご意見、ご要望を吸いあげてはどうかと思い、企画中である。

最後に、会員の若い先生には、新しい技術を取り入れ、新たな知見を引用しながら構築された研究を、奮って杏林医学会雑誌を含めて雑誌に投稿していただきたいと願っている。杏林医学会雑誌は新たな企画をし、読んでいただける雑誌を目指していきたい。

